

2022年12月1日

全日本海員組合本部会館（大高正人設計）保存改修工事決定

全日本海員組合は、本部会館（東京都港区六本木、1964年竣工）を保存改修することを決定いたしました。

本部会館は、工業化部材の開発から都市スケールの計画やまちづくりに至る幅広い仕事に取り組み、戦後の建築界を牽引した建築家・大高正人による設計です。前川國男建築設計事務所から独立したばかりの大高が手がけたこの本部会館は、大高が設計チーフを務めた東京文化会館と共通するデザイン要素も多くみられます。一方で、1960年の世界デザイン会議で槇文彦と共に提案した「群造形」の理念に基づき、都市環境の一部でありながら、彫りの深い個性的な表情を持つ建築となっています。

本部会館は全日本海員組合によって非常に丁寧に維持管理されてきましたが、老朽化や耐震問題などにより、2000年代には建て替えも検討されるようになります。しかし、既存不適格である本部会館を建て替えると延床面積が大幅に減ることなどから、結論が出せない状況が続きました。そんな折、2016年に国立近現代建築資料館にて「社会と建築を結ぶ-大高正人の仕事」展が開催されるにあたり、現存する大高建築として本部会館が取り上げられ、その造形と共に状態の良さは建築関係者に感銘を与えました。2017年にはドコモ・ジャパンにより、「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」の代表的作品として選定されています。こうした動きが後押しとなり、大高事務所出身である野沢正光氏が主宰する野沢正光建築工房の設計による改修が決まりました。改修ではサンクンガーデンの復旧、文化活動等にも利用できる設備と設えへの地下大会議室の更新、展示資料室の新設なども計画されており、竣工後は組合員間のみならず地域の交流の場となることが期待されます。

開発の荒波に呑み込まれる六本木の地であって、全日本海員組合がその拠点である本部会館の保存改修を決定したことは、極めて稀有なことであると言えます。建築的・歴史的価値をふまえた改修設計とすることを目指して設置された全日本海員組合歴史調査および将来構想委員会は、改修工事の前後に及び改修中に見学会や研究会を開催し、本建築継承の意義を検証し、本部会館が新たな文化的拠点として再生されることを後押しします。





全日本海員組合本部会館

(1964年竣工、設計：大高正人、構造設計：青木繁)

見学会 × ドコモモ・ジャパン選定プレート贈呈式

内容：改修工事前見学会（解説付）、ドコモモ・ジャパン選定プレート贈呈式

申込方法：QRコードより、2022年12月16日（金）までにお申込みください。

場所：東京都六本木（詳細は申込者にお知らせします）

参加費：無料

主催：全日本海員組合本部会館歴史調査および将来構想委員会

共催：ドコモモ・ジャパン

2022年

12/18（日）
10:00~



取材・見学会・イベントに関するお問い合わせ
全日本海員組合歴史調査および将来構想委員会 事務局
otaka.rekishi@gmail.com (担当：藤本)

改修概要

場所：東京都港区六本木 15-26

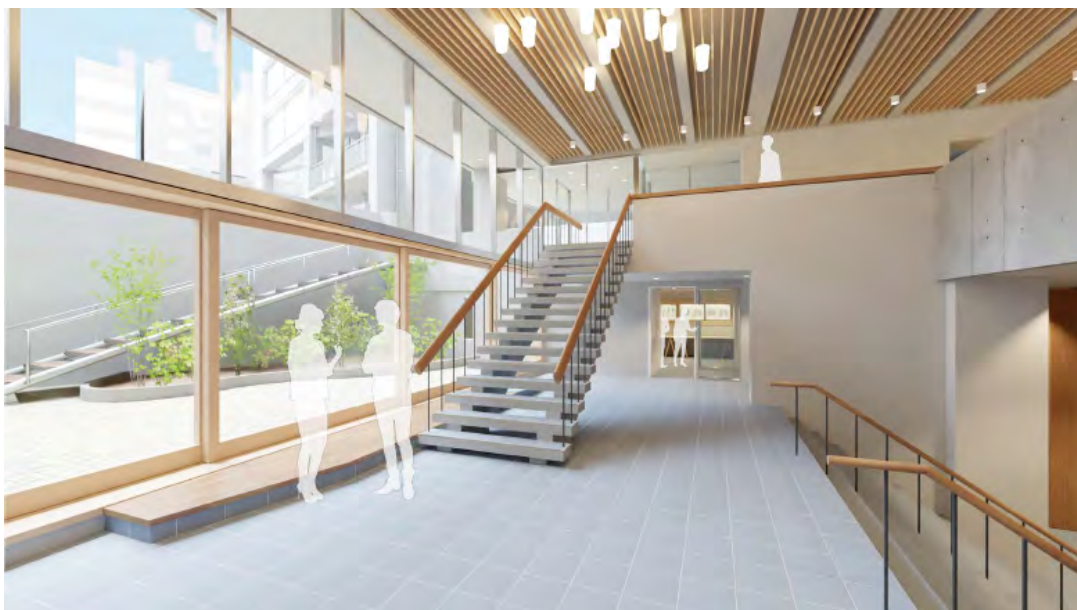
工事期間：工事期間 2023年1月10日～2024年9月30日（予定）

設計：野沢正光建築工房、山辺構造設計事務所、ZO 設計室

施工：竹中工務店



外観（六本木通り側）



地下1F ロビーからサンクンガーデンを望む



オフィス階

計画案の特徴

1. 機能性・快適性・省エネルギー性能の今日化を実現する

設備、内外装仕上げ、内外建具等の全面的な改修を行い、建物の省エネルギー性能の向上を図り、温熱性能、換気、照度の快適化を行います。アスベストは全面撤去します。排煙・消防設備計画などで既存不適格となっている事項については是正を行います。

2. 改修後 50 年以上の建物の利用と、次の世代による改修も想定した計画とする

サンクンガーデンへの増築部分の撤去と建物 4 隅の片持ち梁の補強を行うことにより、耐震性を向上させます。構造躯体と庇などの非構造部材の現状調査を行い、適切な補修を行います。コンクリートブロック造の間仕切壁撤去など、建物荷重の軽減化を行います。

3. 海員組合の歴史を継承する

竣工当時のサンクンガーデンを復旧します。オフィスとしての機能性や快適性に影響のないものは、竣工当時の仕上げや形状を積極的に保存または再現します。地下大会議室の公開、展示資料室の新設など、海員組合の歴史と改修計画について広く発信し、組合員相互並びに地域との交流の推進を図ります。

全日本海員組合歴史調査および将来構想委員会による評価

野沢正光建築工房による検討と並行して、建築的・歴史的価値をふまえた設計とすることを目指し、有識者による「歴史調査および将来構想委員会」が設置されました。委員会では、設計当時の状況を関係者への聞き取り及び資料を通じて検証し直すとともに、建物の現状を把握して継承すべき点を明らかにし、設計監理チームと協議を行ってきました。最終的に、13 の観点から計画案を評価し、現代的な保存改修計画として望ましいものであることを確認しました。

全日本海員組合と本部会館

全日本海員組合は、船員と海事関連産業で働く人々で組織する日本で唯一の産業別労働組合です。現在、日本人組合約3万人と非居住特別組合員約5万人が加入しています。全日本海員組合の結成は戦後すぐの1945年10月ですが、1921年の日本海員組合の結成から数えると、100年を超える歴史のある労働運動の先駆者的存在です。

戦前以来、海員組合の本部は神戸に置かれていましたが、戦後に活動の中心が東京に移ったため、移転の可否が問題となっていました。しかし、神戸は海上労働運動発祥の地であり、初代組合長が私財を投じて建設した神戸の本部建物からの移転には強硬な反対意見もありました。3度にわたる全国大会での議論の末、東京への移転が決定されたのは1959年でした。そこから敷地選定の結果、現在の敷地の購入が決まり、1961年に大高正人に設計が依頼されます。こうして、1964年に「組合員の団結の象徴」*として完成したのが現在の本部会館です。以来60年近い間、組合の拠点としてその活動を支えてきました。

*「組合本部会館完成」『船員しんぶん』(第887号、1964年3月16日)より

保存改修決定に至る経緯

全日本海員組合本部会館は1964年、同組合本部の神戸から東京への移転に伴って建設されました。設計は建築家・大高正人が率いる大高建築設計事務所でした。発表当時は、複数の代表的な建築雑誌にも取り上げられ、大きな注目を集めたと思われます。その後、1976年には増床の必要からサンクンガーデン部分に増築工事が行われ、1978年と1994年には全面改修工事が行われました。こうして増築や改修を繰り返しながら、竣工から40年余りの間丁寧維持されてきましたが、老朽化や耐震問題、周辺開発の状況などを踏まえて2007年に本部会館に関する検討委員会が発足し、本部会館のあり方の検討が開始されました。2011年の東日本大震災では、窓ガラス破損やクラックなどの被害を受け、対応は喫緊の課題となりました。しかし、既存不適格である本部会館を建て替えると延床面積が大幅に減ることなどから、結論が出せない状況が続きました。

そんな折、2016年に国立近現代建築資料館にて「社会と建築を結ぶ-大高正人の仕事」展が開催されるにあたり、現存する大高建築として本部会館が取り上げられ、シンポジウムや見学会が開催されるなど、改めて注目を集めることとなりました。2017年には、モダン・ムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織であるDOCOMOMO (The Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of the Modern Movement) の日本支部であるドコモモ・ジャパンにより、「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」の代表的作品として選定されました。

こうした動きも後押しとなり、大高事務所出身である野沢正光氏が主宰する野沢正光建築工房および全日本海員組合本部会館の構造設計者であった青木繁氏の事務所出身である山辺豊彦氏が主宰する山辺構造設計事務所による調査と検証が行われ、増築部分の撤去を行うことで耐震性能が確保できるという結果が示されました。これに基づき、今後の長期的な使用に耐えうる改修計画が提案され、保存改修の決定に至りました。

取材・見学会・イベントに関するお問い合わせ

全日本海員組合歴史調査および将来構想委員会 事務局（担当：藤本）

otaka.rekishi@gmail.com